

心と身体をつなぐ試み

岡 本 雅 子

1. はじめに

2. 地域社会との関わり
 - 2-1. 地域社会の役割と変容
 - 2-2. 地域活動の実態

3. 家族との関わり
 - 3-1. 現代の家族像
 - 3-2. 教育現場の課題についての考察

4. 人間関係の構築とノンヴァーバル・コミュニケーション
 - 4-1. グループ・ワークと人間関係の構築
 - 4-2. 人間関係が及ぼす身体的影響

5. おわりに

1. はじめに

心と身体をほぐし、心身ともに開放することを目指して始めた研究であるが、このことを考えるにあたって、現代人を取り巻く様々な要因の影響を抜きには語れないという思いに至っている。どの要因に対して、どのようなアプローチをすることが最善なのかは不明である。回り道になるかもしれないが、前回の積み重ねに加え、異なる視点のアプローチも試みたいと思う。

対人関係が精神的にも身体的にもストレスとなっている現代の若者像について、そして、対人関係のあり方が、現代人の心身の問題に関わる重要なキーワードであることは前回述べた。身体、そしてそれに関わる心の問題を考える際に、「身体の問題は、人間存在の問題であり、人間存在とは、人間関係の総和にほかならない」¹⁾とされていることから、人間関係の重要性が伺われる。又、先年にも増して、今年度は人間関係に起因する学生のつまづきが多発し、学生の「育ち」の過程に対人関係に関する何らかの不足があり、その解決法の探求が、今後教育現場が担わなければならない課題であることを痛感している。

又、都市化、核家族化による対人関係の希薄さ、テレビやコンピューターゲームに没頭することによる離人傾向が及ぼす影響については、凶悪な少年犯罪が起こるたびにクローズ・アップされる話題である。このことは、現代人の対人関係のあり方自体に対する疑問を、如実に表していると言っ

てよいだろう。

平成13年、文部科学省は『幼稚園におけ

る道徳性の芽生えをやしなうための事例集』を作成し、より良い対人関係を築く基礎を幼児教育に求め始めた。又、NGO、NPOは地域社会の活動を通じて、現代人の対人関係の希薄さを補う活動に取り組んでいる。現代人を取り巻く対人関係の現状を把握し、問題点を認識し、そして、早急に問題を解決するための手段を講じることは、様々な心身問題に起因する諸問題の解決に通ずるはずである。そしてこのことは、我々教育に関わる者にとっても急務なのではないだろうか。

2. 地域社会との関わり

2-1. 地域社会の役割と変容

元来わが国においては、村落(共同体)が長く続いていた。鈴木栄太郎は、その団結力、結束力の強さが特有である村落(共同体)が長く続いた理由として、

灌漑排水のための協力(協同利害)
一定の土地への定着(土地への執着心)
特殊な婚姻習俗(地縁の上の血縁)
江戸時代の村治制度(様々な相互扶助の慣行を含む)

を挙げている。この村落(共同体)の、ある意味排他的、閉鎖的でもあった集団的結束力は、戦後の法や制度の民主化を妨げるものであると考えられた。つまり共同体的な思考や行動は悪の根源としてとらえられ、そこからの開放が進められた。その際、村落(共同体)の持っていた精神的な抑止力、

1) 菅 孝行『身体論』れんが書房新社 1983, p. 39

つまり「ときには個人も家も相互に無制限な甘えを通じて渾融一体化し、盲目的に流されてゆく方向を抑止する歯止め装置が、共同関係自体に働いていた点」²⁾や、「氏神信仰を媒介として生じる『集団生活を聖化する規範は、正しく機能すれば日常の共同生活を破壊するような個人のエゴイズムをきびしく抑制するはずであり、むしろこの方に本来の使命があった』³⁾点も一緒に捨て去られたのである。

このような役割を担っていた共同体(村落)からの個の開放は、人々の生活や理念を大きく変化させた。すなわち、「国家中心的のいわゆる富国強兵(軍事)型近代化から、個人(企業)中心の産業振興型近代化への転換」⁴⁾であり、「非合理的で滅私奉公的な生活から、合理的で自己本位な生活へ」⁵⁾と変化したのである。もちろん人間関係のあり方も、共同体的なあり方は民主化を妨げるものとして捉えられていたので、そこからの開放が民主主義運動の重要課題とされたのである。しかし、皮肉なことに、朝鮮戦争以降の「高度成長」と「歩調を合わせて、〈個〉の開放は本来の意味を失って分解」⁶⁾されていき、「もともと根が浅く、市民社会の試練を受けていないわが国の個人主義は、たちまち『私』性の異常な肥大化によるエゴイズムへと転身」⁷⁾していったのである。

このようにして、わが国が本来持ってい

た、地域的な閉鎖的な縛りから開放された我々日本人は、本質的には意味の異なる自由(自由気まま)と、自分や自分の家族さえ幸せならば良しとする個人主義(の慣れの果てのエゴイズム)を手に入れたのである。下記の大阪市内の小学5・6年生への調査、資料1を見ると、自由を「何をしてしても許される自由」⁸⁾と履き違えている実態が良くわかる。

資料1

信号無視をする	(97%)
いたずら電話をする	(66.1%)
カンニングをする	(70.6%)
万引きをする	(43.2%)

大阪幼少年教育研究所と大阪児童研究会の調査(1999)

もちろん、地域差や対象数の影響もあるだろうが、青少年問題の実態或いは、背景が垣間見られると言えるであろう。このように、地域社会における人間関係の規範による抑制力を持たぬ現在、個人の自由を追求すればするほど他人の自由を損ない、人間関係に歪みを生じさせるのも当然である。くも子ども研究所による全国の小・中・高校生への調査によると、四人に一人が「親の干渉や他者とのコミュニケーションへの不安」⁹⁾を訴えている。このように、現在多くの子ども達が人間関係に悩みを持ち、不適応を起こす者も多々いるが、その原因

2) 間庭充幸『共同態の社会学』世界思想社 1978, pp. 27-28

3) 同上 p. 31

4) 同上 p. 103

5) 同上 p. 103

6) 同上 p. 105

7) 同上 p. 105

8) 日本子どもを守る会編『子ども白書』草土文化 2000, p. 227

9) 同上 p. 229

の一つがこの地域社会の抑止力の喪失であり、そしてそれに伴う生活の変化であることは間違いないであろう。「真の人間性と連帯はみずからのエゴイズムを相互にのり越えることを通してでしか確保されない」¹⁰⁾という、人間関係の本質を再確認する必要があるだろう。

2-2. 地域活動の実態

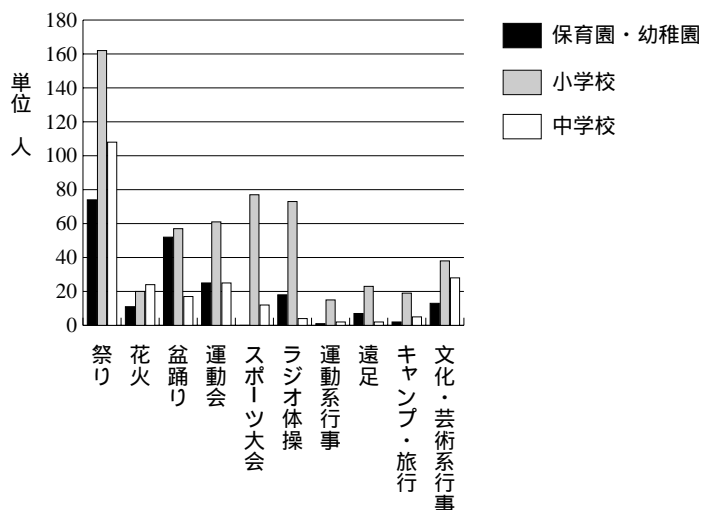
『子ども白書』2000年度版において、「子

ども・青年が参加する地域づくり」が大きく提唱され、同時期、NPO(特定非営利活動法人青少年活動ネットワーク)がスタートした。これまでの地域活動の多くは一過性のものが多く、(縦に横に時間で区切られた活動や事業は「活動の内容や方法やその成果がわかりやすいからなのかもしれませんが、そういったブロック(科目)型の活動は、地域活動とはいえません。地域機能を破壊している可能性」¹¹⁾もあると、連続し

資料2 地域行事参加調査

幼児教育科1年生 103名回答(複数回答)

	保育園・幼稚園	小学校	中学校
祭り	74	162	108
花火	11	20	24
盆踊り	52	57	17
運動会	25	61	25
スポーツ大会	0	77	12
ラジ体操	18	73	4
運動系行事	1	15	2
遠足	7	23	2
キャンプ・旅行	2	19	5
文化・芸術系行事	13	38	28



10) 間庭充幸『共同態の社会学』世界思想社 1978, p. 133

11) 日本子どもを守る会編『子ども白書』草土文化 2000, p. 40

た地域社会における人間関係の構築を勧めている。又、「地域の祭りや行事参加は高率でも、人間関係が自己中心的で希薄である傾向は否めません」¹²⁾と述べられているように、一過性の地域活動への参加は活発だとしても、人間関係問題の解決には繋がりにくいことが伺われる。では、実際にどのような地域活動に参加しているのか、本校幼児教育科学生へのアンケート調査の結果から、その傾向を探りたい。

資料2について、保育園・幼稚園時代に關しては、記憶が定かでないという点が考えられる。又、高校時代、現在については、中学時代よりも更に参加数が減少しており、「祭り」、「花火」に傾っていたこと、更に「祭り」の中には花火大会を伴うものもあるが、「花火」を見ることだけが目的の場合は「花火」の項目にカウントしたことを補足する。

資料2からわかることは、まず、様々な地域行事に参加した経験は、小学校時代に偏っていることである。つまり、小学校校区を中心とした子ども会活動が、どの地域においてもかなり盛んであり、地域のスポーツ系の行事のほとんどが子ども会の活動であると考えられる。芸能系の「盆踊り」に關しても、開催の主催の単位の多くは小学校校区やその中の町単位であるため、子ども会を離れる中学生になるととたんに参加数が減少する。芸能系の中でも「花火」は小学校時代よりも参加が増える。つまり、より一過性が強く、イベント性の高い行事については中学校時代以降も参加をするが、地域とつながる活動については、小学校卒業を機にほとんど参加しない現状が伺われ

る。このことから、地域密着型の行事は中学生以上の若者にとって参加しにくい、或いは魅力がないものであり、観光・イベント型の行事は中学生以上の若者層が参加しやすい、或いは魅力があり、若者の集客ができるという実態がわかる。この実態は又、かつての青年団組織のような、若者が活動をする環境が整っていないこと、ひいては、子どもから大人になる過渡期において、家族、学校の友人を除いては、モデルとなりアドバイスを受ける場がないことをも意味しているように思われる。

この調査結果からは、地域社会との関係の希薄さを、如実に表しているような結果が得られたわけである。「年齢の異なる異世代間との交流は当然のこと兄弟姉妹あるいは同世代間との交流さえも求めることが困難になって」¹³⁾きていると言われている通り、地域社会の中での人間関係を形成する環境は、かつてのように自然発生的には存在していないという事実是否めないであろう。

3. 家族との関わり

3-1. 現代の家族像

次に最も小さな社会であり、人間関係の基盤である家族について考えていきたい。戦後の民主化・都市化・核家族化・少子化・住宅事情等の変化を経て、家族の役割というものも随分変化してきたようである。その結果、「かつての大家族でまかなわれていた生産・教育・宗教・娯楽・扶養などの家族の機能が縮小ないしは喪失してきた」¹⁴⁾と言われるに至っている。そのように言わ

12) 日本子どもを守る会編『子ども白書』草土文化 2000, p. 231

13) 坂口哲司編『人間関係』ナカニシヤ出版, 2001, pp. 8-9

14) 同上 p. 90

れている家族の姿を考えるために、親子のコミュニケーションについて論を進める。

まず親子のコミュニケーションの基本であり、かつ重要である子どもとの会話に関しては、1996年の総務庁青少年対策本部の調査結果では62.1%の親が「よく話をする」と回答し、2001年の財団法人日本青少年研究所の調査結果では56.7%の親が「よく話すほうだ」と回答している(質問の回答者の多くは母親であった)。つまり、この5年間に限れば、6割近くの親は子どもと「よく話をする」と認識しており、このことからは一見、我が国では親子のコミュニケーションが十分にとられているように思われる。しかし、資料3のように、実際に親子がどのくらいの時間接触しているかという調査結果を見ると、日本においては父親で30分、母親で1時間がピークであり、アメリカと比べて親子の接触時間の少なさが顕著である。韓国と比べるとグラフの形状が似ているが、それでも日本の方が接触時間の少ない者がより多く、接触時間の多い者がより少ないといえる。この調査結果を考慮すると、果たして本当によく話をし、十分にコミュニケーションがとれているのか、少々疑問である。その共有している時間が短い割には、その中でよく会話をしている、と解釈するべきであろうか。しかし、「他の人々と場面を共有し、そのことによって他の人々と類似の体験をすることが、人々相互間に共感が生まれる重要なきっかけとなり、しかも共感の有無がその後の人間関係に影響を及ぼすことになる」¹⁵⁾とされているように、親子の時間の共有は、青少年の人間関係に関するつまづきを解決する重

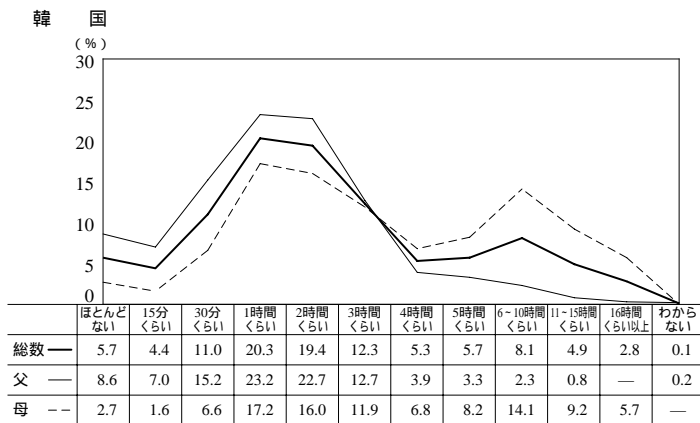
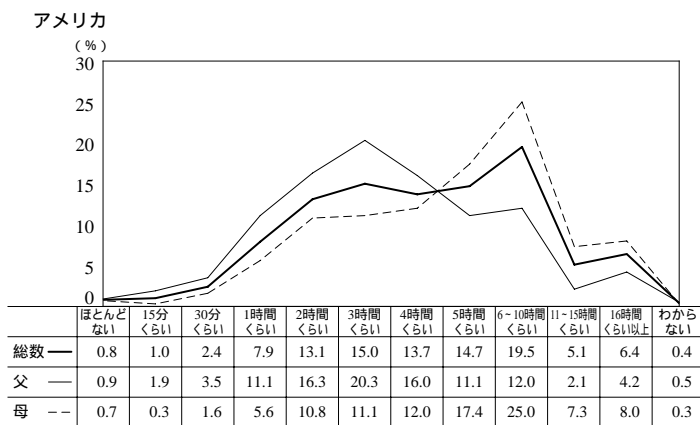
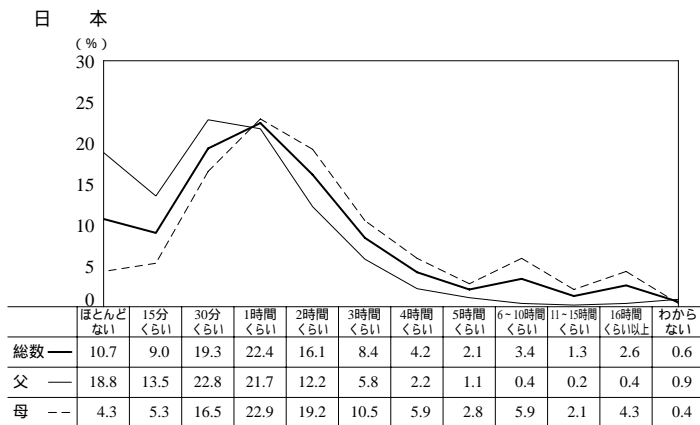
要な要素であると思われる。

次に、その親子の会話の中で、子どもに対してどのようなしつけがされているのかについて論を進める。資料4の子どもによく言うことに関する財団法人日本青少年研究所の調査結果からは、現代の家庭教育の姿が伺われる。人間関係、社会生活という視点から注目したいのが、「礼儀正しくしなさい」「約束をちゃんと守りなさい」「親の言うことをよく聞きなさい」「先生の言うことをよく聞きなさい」「友達と仲良くしなさい」の5項目である。これらの質問項目全てにおいて、中国の親に比べて子どもに言い聞かせていないことがわかる。そして「約束・・・」以外は、中国に比べて半数以下の親しか子どもによく言うことと回答していない。親や先生の言うことを聞くように、友達と仲良くするようにと家庭で教わっていない子どものなんと多いことか。この理由には、子どもの自主性や個性の尊重と、家庭教育の放棄の両面が考えられるが、逆にしつけの言葉をよく子どもに言えばいいという問題でもない。「自分に向けられた実際の行為に接しながら子どもはその背後にある「心」を感じとり、「心」を感じとることができてはじめてことばをその心の表現として受け取ることができるのである。したがって、実際の行為を省略してことばだけで「心を」伝えようとしてもそれはもともと無理なこと」¹⁶⁾なのである。つまり、しつけの言葉をよくかけるだけで、子どもがよくしつけられるとは限らないのである。しかしながら、子どもと共有する時間の短さやしつけの言葉の少なさは調査結果から明らかなのであり、このような家庭教育の実態を把握

15) 守屋慶子『心・からだ・ことば』ミネルヴァ書房,1982,p.247

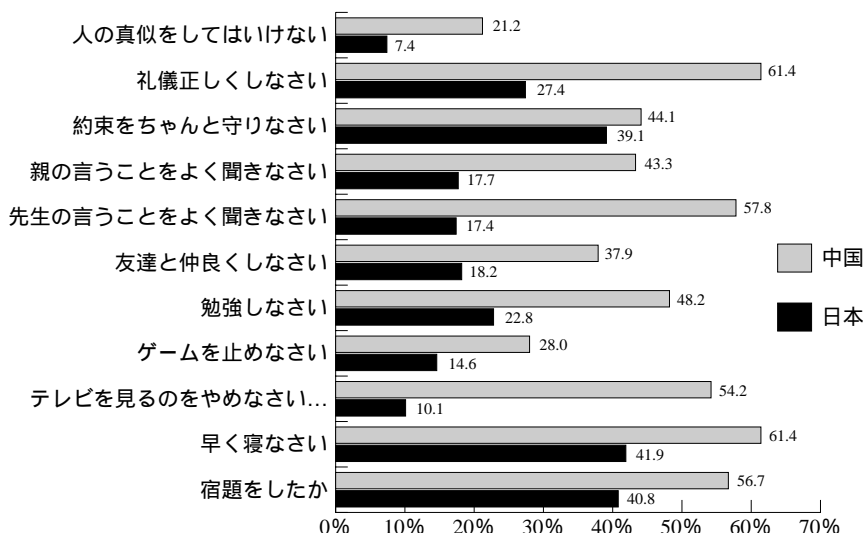
16) 同上 pp.250-251

資料3 親子の接触時間



総務庁青少年対策本部編『子どもと家族に関する国際比較調査報告書』1996より

資料4 子どもによく言うこと



財団法人日本青少年研究所『子どものしつけに関する報告書』2001より

することは、幼児教育・学校教育の現場として、非常に重要なポイントではないだろうか。

学校での様々な問題の原因となる、今までの教育のスタイルでは補いきれない要因は何か。よく言われることが、家庭教育の崩壊である。では家庭教育の崩壊によって、子ども達が学んでいないことは何か。それがまさしく人間関係の築き方なのであろう。それは対友人や対教師だけでなく、家庭においてさえも自主性の尊重により、対親、対兄弟の人間関係を築く訓練が疎かになっている可能性が十分にある。

3-2. 教育現場の課題についての考察

上述のように、我が国においては、幼少の時期から自主性を尊重した家庭教育が行われていることが伺われる。このことは教育現場も同様で、集団行動・活動を押しつ

けるのではなく、個性や自主性を尊重する要領に移行し、実践されてきていることは周知のとおりである。では、本来の個性や自主性の尊重のために、我々は何をどのように補うべきか。教育現場は様々な家庭教育の隙間を埋めることが可能なのか。

過去に何度か、教員に注意を受けたことに対して納得いかず、それが悔しくて泣いたり激昂する学生と話したことがある。どう考えても本人に非があるのだが、それが理解できていないために「何故自分が」と激昂するわけである。冷静になって考えれば、昔から友達の中でも自分はよく怒られる方であった、でもそれは何故かわからなかったことに思い至る。ここで初めて注意を受けた理由について考える必要性に気づいたのである。ある福祉系大学の教員からも、授業中のおしゃべりを注意したところ、「授業にちゃんと出席しているのに注意を受け

るのは納得がいけない」と言われたという話をお聞きした。授業後時間をとり、授業中のおしゃべりが如何に他の学生や担当の教員に迷惑をかけることなのかを話したところ、何故注意を受けたのかが理解でき、他人に迷惑をかけるつもりは全くなかったと素直に自分の非を認め反省したということである。人のために働く福祉の仕事を目指す者が、他人の迷惑になることが理解できないとは、と嘆いていらっしまった。これらのことからわかることは、注意を受けた学生に悪気はなく、決して反抗したくて不服を言ったり態度を改めないのではないということである。理由がわからないだけなのである（そのことの方が、問題であるとは思うが）。前述にもあったが、実際の行為を伴った心の表現としてのことばでコミュニケーションをとったことがないのである。常識、或いは大人だから・大学生だから・高校生だから・・・理解して当たり前、という態度で接することが通用しない学生が増えていることを我々は念頭に置き、子どもの何故何故攻撃に苦慮する親のように、その疑問一つ一つに「心」をもって対応するということが、隙間を埋める方法の一つであるように思われる。

個性や自主性の尊重に関連して、心理臨床場面からの警告もある。価値観の多様化により、「個の独自性が一見創意されているかの錯覚におちいります。他との共感性を持たない独自性のために、かえって孤独感や孤立化に結びついてしまっています。」¹⁷⁾とされているように、個性や自主性の尊重が下手をすると孤独感や孤立化につながる危険性も示唆されている。このことは、

少子化・核家族化・地域とのつながりの疎遠さなどの人間関係の希薄さを考えると、非常に問題であると思われる。又、放任しっぱなしの子どもについては、「“よい”関係に対し充足感を得ながら成長はするが、他者が介在せず、しつけの主体が明確にはならないため、自他の区別ができなくなり、いわゆる自分勝手になってしまう。その人の社会にはまったく他者は介在しないし、他者の意向があることにすら気づいていない」¹⁸⁾とされている。何故注意を受けるのか、何故他人の迷惑になるのかわからないのは、自分の世界の中に他者の存在がないからなのであろう。様々な個性や価値を理解し認め合い、本来の意味での個性や自主性を尊重するためにも、幼児教育・初等教育では人間関係の築き方の基礎を、中等教育・高等教育ではグループ活動・集団行動による様々な人間関係のあり方を、地域においては異年齢間・様々な価値観の中での人間関係のあり方を学ぶ環境を整えることが必要なのではないかと考えられる。

4. 人間関係の構築とノンヴァーバル・コミュニケーション

4-1. グループ・ワークと人間関係の構築

ここでは、グループ・ワークを通じて、対人関係が如何に変化し、人間関係が構築されるかについて考えたい。先にも述べたが、今年度の幼児教育科1年生に関しては、人間関係に起因するつまづきも多く、又、共同作業に関しても例年に比べて上手くできないと、実習、演習系の科目を担当する教

17) 坂口哲司編『人間関係』ナカニシヤ出版, 2001, p. 98

18) 松浦健児・嘉部和夫『人とかかわる心理学』学陽選書, 1984, p25

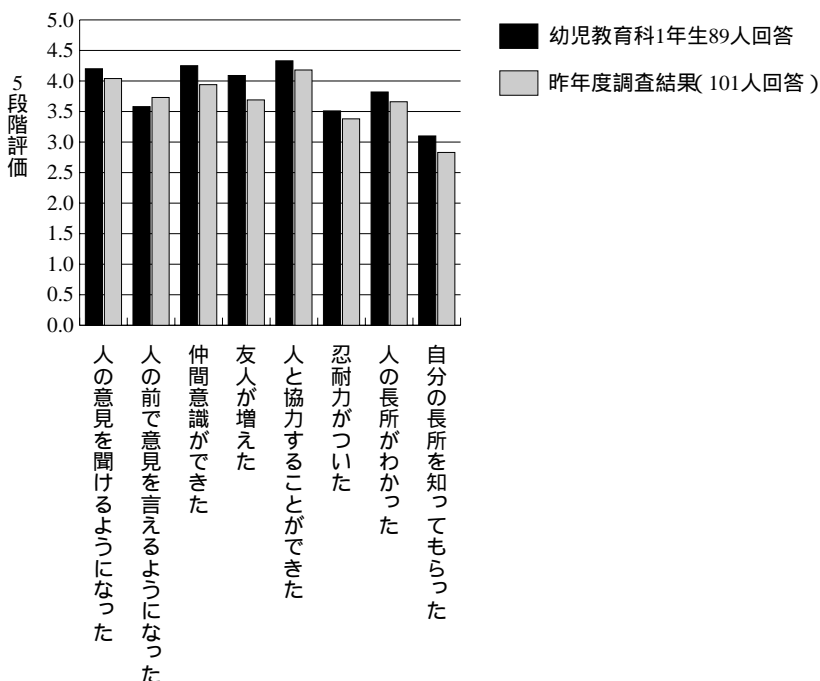
員間で話題となっている。多少のクラス間の差はあるものの、ペアやグループ分けについて、どのクラスも、ある程度教員側の配慮を要するデリケートなケースがあった。クラスの友人の動向に関しても、仲良しグループでなければ情報が通じていない、或いは関心がない。放課の共同作業には不平不満を言う、或いは協力しない、教員の指示がないと動けない。例年ならば入学当初には見られても、半年も経てば改善ぶりが目に見えるはずが、逆に人間関係のまずさ

の方が目立つようになった。将来、教員として子ども達や保護者と接する者であるのにと、非常に心配になった。しかし、上手く活動できなくても、グループ・ワークを続ける中で学生自身の意識は変化していたのである。

資料5は、グループ・ワークで得たものは何かという質問に対して、強く思うことを5、全く思わないことを1とする5段階評価で、昨年度の調査と比較している。調査前には、グループ・ワークが比較的スムー

資料5 グループ・ワークで得たことは何か

	幼児教育科1年生89人回答	昨年度調査結果(101人回答)
人の意見を聞けるようになった	4.2	4.04
人の前で意見を言えるようになった	3.58	3.73
仲間意識ができた	4.25	3.94
友人が増えた	4.09	3.69
人と協力することができた	4.33	4.18
忍耐力がついた	3.51	3.38
人の長所がわかった	3.82	3.66
自分の長所を知ってもらった	3.1	2.83



スであった昨年度よりも、数値が低いものと予想していたのだが結果は逆であった。「人の前で意見が言えるようになった」以外の項目全てにおいて、今年度の方が上回っている。中でも「友人が増えた」は0.4ポイント、「仲間意識ができた」は0.3ポイントも上回っている。このことから、入学前にあまり実感していなかったため、以前に比べて人と協力できるようになった、そして仲間を意識するようになったと感じる者が増えている、と解釈できるであろう。新要領（平成元年3月15日告示）が定着し、個性や自主性を尊重されて育った彼らは、もしかしたら初めて自分の意見を曲げ、他人のために行動し、仲間との一体感を体験したのかもしれない。「友人が増えた」に関しては、「様々な方法でグループ分けをしたので、普段と違う人と接することができてよかった」という自由記述の回答があったことを補足する。同じ目的を持つ者同士だから、小学・中学・高校時代よりも仲間は作りやすいはず、という固定観念にとらわれず、授業を通じて自然に仲間が増えるような環境を提供する必要性を実感した。

4-2. 人間関係のあり方が及ぼす身体的影響

上述のように人間関係が疎遠である学生にグループ・ワークを課すことは、様々な問題点があるものの、逆に、以前に比べて友人ができ、仲間意識を感じるという認識が非常に強いことがわかった。しかし、そこに至る過程では、或いはそのことに起因する精神的・身体的ストレスは、その分強いものと考えられる。

資料6は幼児教育科1年生に対し、人と接する(身体的に)際に感じることを質問

し、昨年度の1年生と比較したものである。ここからは、人と身体的接触を持つことは、昨年度に比べて安心感が感じられなくなっていること、そして、不安感や嫌悪感はより強く感じられるようになっていることがわかる。これらは、ペア・ワークやグループ・ワークが苦手であること、人間関係の構築が苦手であることと根は同じであると考えられる。一方、仲間意識を感じたり、仲良くなったと感じる者もグループ・ワークの調査と同様に増えている。ここで、1年間で自分が変わったことという質問に対する自由記述の回答で、「人前に出ること、随分慣れた」「色々な人と話ができるようになった」そして「そこまで関わりたくない」と答える者がいたことを補足する。つまり、人前に出たり、人と身体が接触するほど親密な関係を持つ経験が少なく、以前の学生よりも恥ずかしがったり、嫌だと感じる者が増えている。しかし、そのことによって、逆に以前の学生よりも強く仲間を感じ、仲良くなると感じる効果もあるということが言えるのではないだろうか。

以上のことから、グループ・ワークや身体的接触を持つことは、今の学生にとっては非常にストレスにもなり、逆により良い人間関係の契機ともなる二面性が伺われるわけであるが、では、彼らにとってストレスを感じない、リラックスでき安心できる場はどのようなところなのか。

資料7は幼児教育科1年生に対し、どのような時に身体がリラックスしていると感じるか質問し、昨年度の1年生と比べたものである。「家にいる時」「外出している時」は、家庭が彼らにとってどのような場であるのかを知るため、そして「趣味・・・」は、個性が発揮できる場として設定し、今年度

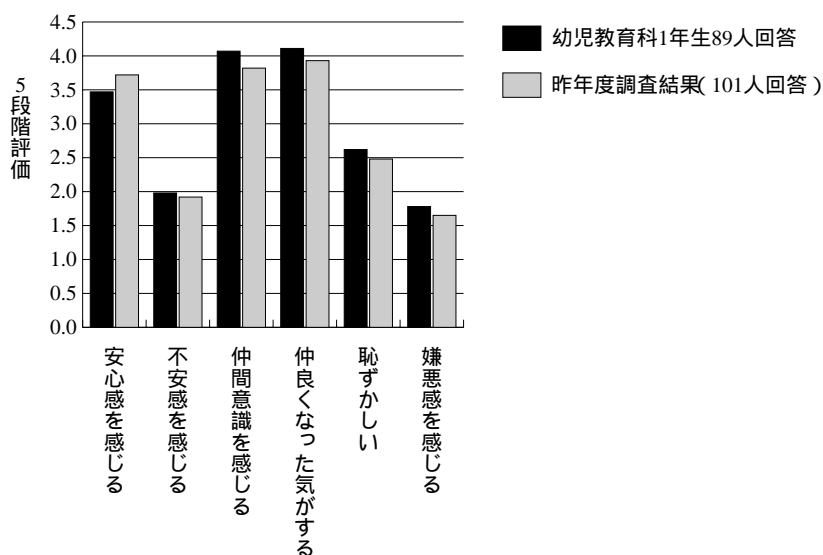
新たに質問項目に加えた。又、昨年度の回答者と回答者数が異なるため、人数比を考慮しながら考察を進める。

物理的に身体が休んでいる状態、消極的休養である「お風呂に入っている時」「寝ている時」に関しては、昨年と同様の傾向を示し、最もよく感じられている。しかし、昨年度2番目に多く回答された「マッサージをしてもらっている時」は、身体は血行が良くなり、筋肉がほぐれるなど、物理的には多く感じられて当然である項目なのであるが、今年度は激減している。このことは、筋肉がほぐれて物理的に身体が休んでい

も、精神的な不安つまり人と身体的に接すること、ひいては人間関係に対する不安が強ければ身体はリラックスできないという、精神面が身体に及ぼす影響の強さを表していると言えるだろう。逆に、「音楽・・・」「誰もいない時」「家にいる時」などの個(この場合個性ではなく個体か)が守られる場面においては、人数比を考慮すると大幅に増えている。対人関係に関する項目「誰もいない時」「誰かといる時」は、合わせて6割の者が解答しており、対人関係と身体の緊張・開放をつなげて感じている者が、昨年度よりも1割増となっている。これらのこ

資料5 身体的接触に関する調査

	幼児教育科1年生89人回答	昨年度調査結果(101人回答)
安心感を感じる	3.47	3.72
不安感を感じる	1.98	1.92
仲間意識を感じる	4.07	3.82
仲良くなった気がする	4.11	3.93
恥ずかしい	2.62	2.48
嫌悪感を感じる	1.78	1.65

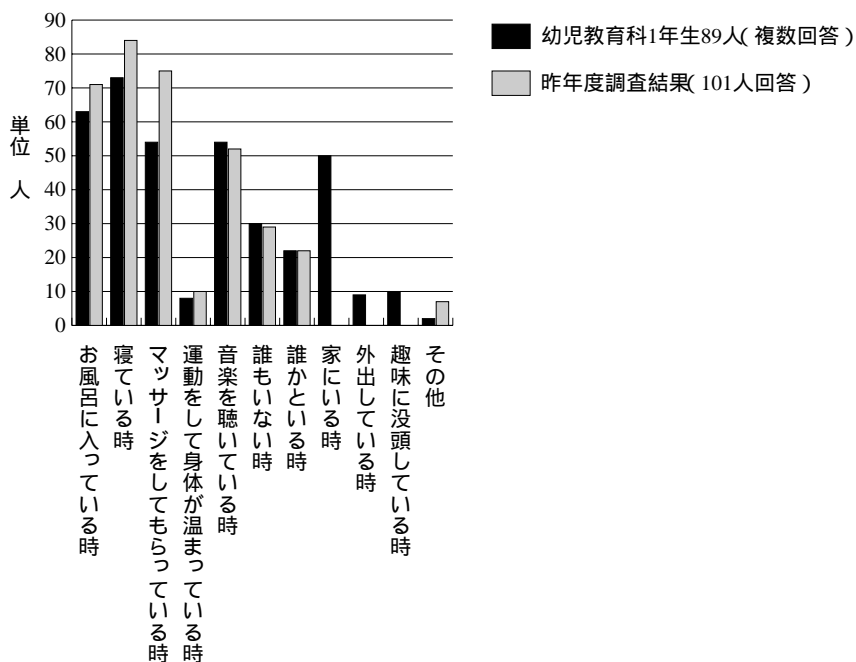


とから，対人ストレスは年々強く感じられるようになっており，個が確保される場なければ精神的にも身体的にも開放されにくい現状がわかる。「家にいる時」は，やはり6割の者が回答しているが，これは家族が心の支えとなっているからなのか，それとも子ども部屋という個の確保されたス

ペースに起因することなのか明らかでないため，今後追跡調査を行いたい．尚，「外出している時」に関しては，家にいるのが嫌だという消極的理由ではなく，ショッピングやカラオケなどストレス発散のために位置付けている者が多く，積極的な休養として考えられるということをつけ加える．

資料7 身体がリラックスするのはどのような時か

	幼児教育科1年生89人回答(複数回答)	昨年度調査結果(101人回答)
お風呂に入っている時	63	71
寝ている時	73	84
マッサージをしてもらっている時	54	75
運動をして身体が温まっている時	8	10
音楽を聴いている時	54	52
誰もいない時	30	29
誰かといる時	22	22
家にいる時	50	
外出している時	9	
趣味に没頭している時	10	
その他	2	7



5. おわりに

心と身体の開放を目指すには、対人関係のあり方が、非常に大きな問題となることを実感している。又、人間関係を如何に構築するかという方法も、現代の若者にとってみれば自然発生的に学べるような環境ではない。このことは家庭教育だけ、或いは学校教育だけで補いきれる問題ではない。しかし、我々教育機関も早急に取り組まなければならない問題であると思う。

学生の疑問への「心」ある対応、グループ・ワークの効果は、より良い人間関係を築くためにある程度有効であろう。又、「ことばに依存したコミュニケーションによって人間関係が豊かになるのは、心の表現としてのことばを裏打ちする実際的行為をたえず補う場合だけである」¹⁹⁾のならば、ノンヴァーバル・コミュニケーションは人間関係の核になるはずである。対人関係にあっては、「己れ自身を知り、相手を知り、自己を主張し、一緒に事に当たれ」²⁰⁾とよく言われているが、これまでの筆者の視点に欠けていたものが、この自己覚知という視点である。他者とのヴァーバルな或いはノンヴァーバルなコミュニケーションだけでなく、自分自身との対話、自分の内なるものの身体への表出、身体を通しての自分とのノンヴァーバル・コミュニケーションを今後更に考えていきたいと思う。

19) 守屋慶子『心・からだ・ことば』ミネルヴァ書房, 1982, p. 251

20) 松浦健児・嘉部和夫『人とかかわる心理学』学陽選書, 1984, p. 68